

サロママベツ川堤防には

〔仁倉川〕

網走監獄受刑者の汗と血と涙が
染み込んでいる

我が佐呂間町を縦貫して流れるサロママベツ川は、開拓以来、流送、稲作、その他多くの水利等母なる川として、住む人と共に百年を迎えようとしている。

而し昭和の初期までは、堤防がなく大雨の度に氾濫をして仁倉地区などに大きな災害を齎らしてきた。

そこで昭和六年の大冷害の救農土木事業として、サロママベツ川築堤工事が取り上げられ、七年より川口から着工されたのです、しかし当時はショベル、トロッコ、馬櫓等による工法で能率があがらず、又労務者不足でも有ったのか、昭和十二年、工事は仁倉五号―六号付近まで進んだとき、網走刑務所から囚徒が派遣され就役する事となった。

昭和十二年春、仁倉九線の六号交点の南東一〇〇メートル付近に仮獄舎が建てられ、赤や青の獄衣の受刑者一〇〇人程が移って来た。受刑者は二人ずつ一組に腰から腰を二メートル程の鎖で繋がれたままトロコ押し等作業をするのです。

現場は、現在の道道留辺薬浜佐呂間線の五号―六号間の高台地の道路を切り下げる為

に土取り場とし、六号から二〇〇m程五号寄りの傾斜をサロママベツ川方向に直線にレールを敷きトロコを走らせるのだから、それはそれは物凄いスピードでぶつとんで行く、トロッコの後部に乗った二人がブレーキの柄に掴まり、トロコ箱に片足をかけて力まかせにブレーキをかけるのだが、傾斜が急な為あまり減速されないままトロッコが躍るようにして捨場までいってしまふのだ、万一脱線でもしようものなら鎖で繋がれている為、思うように身を翻す事も出来ず大怪我をする事になるだろう、近所の人々もはらはらしながら見ているばかりだ。

土取場から捨場まで約四〇〇メートル程の距離があり、次々に五―七台のトロッコが土を下ろし土取場へ引き返すのだが、これがまた大変なのである、空車とは言え重い頑丈なトロッコをこの傾斜を四〇〇メートルも押し上げて行かねばならないのだ、二人の囚人は先ず腰の鎖を手操ってトロコ箱へ入れ、まるでトロコを担ぐかの様に肩をかけ、満身の力を絞って一足一足枕木を跨ぎながら喘ぐようにして土取場へ戻るのが、が、又すぐに、ショベルで土を積んで、危ないトロッコに飛び乗って捨場に向かうのだ、幾人かの看守が終日付きりだからちよつとも休む事も出来ない。

又一方仁倉川の築堤工事では、七号付近で川が小高い火山灰質の島のすぐ近くを流れて居るため、その火山灰を運んで築堤する事として、ここでも囚人の一隊が仕事を始めた、

この場所は仮獄舎から六〇〇メートル程離れて居り、朝六時半頃鎖に繋がれた二人が並んで二列縦隊になって現場に向かう。

この現場は条件も良くトロッコを十幾台も揃えて、従って能率も良く工事も進んでいた、而し土取場の切り羽の高さが十メートル以上もあるのに、安全に対する技術不足で有ったのか、或る日〔昭和十三年十月頃〕一生懸命にトロコに積込み作業中、突然火山灰の切り羽が崩れ落ちたのだ。

咄嗟のこと、逃げられなく崩れて来た火山灰の下に一人が生埋めになった、慌てて掘出し救出したが既に息絶えていた。

又、冬になれば積雪の中で工事は続けられなかったから、大変であった、どのような下着が給与されていたのか、本州方面から送られて来て居る者も居るであろう、北海道の冬の厳しさの中で堪えられず、土取場の近くの山林から〔民地〕枯れた枯木などを担ぎ出して、焚火に手をかざして暖をむさぼる姿も、受刑の身とは言え哀れであった。

こうした苛酷な重労働からか、昭和十三年夏一名が脱走、非常線を張った事もあった。

以上、昭和十四年十月までの二年半に渡る受刑者の強制的重労働によって、サロママベツ川支流仁倉川の堤防、延べ二千五百メートルが完成したのです。

〔文責 室井 四郎〕

神殿の引っ越し

佐呂間市街地区の開拓は、明治三十九年、岡山県の移民団と石川県の移民団の入植によって始まる。

開拓者達が、一応の落ち着きを見出したとき、次にしたことは、子弟の教育の場としての学校造りとそして、自分達の故郷で信仰していた神神を祭る祠を建てて、家内安全と繁栄を祈願する事であった。

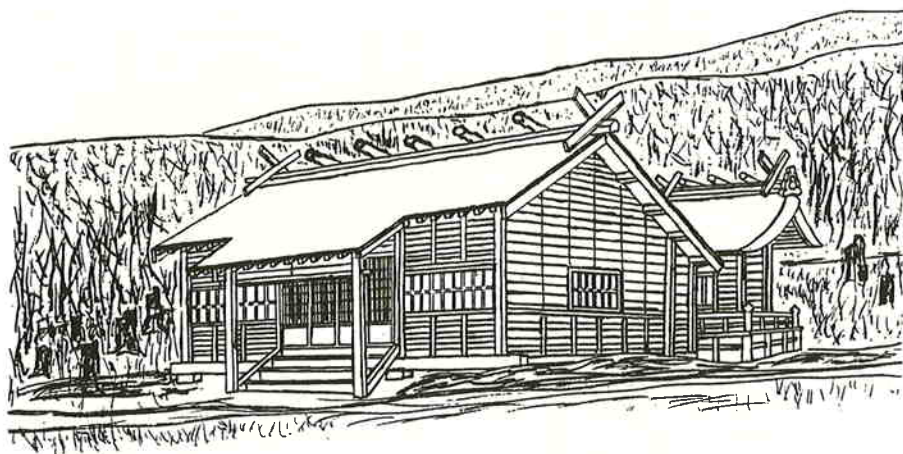
現在の佐呂間神社の前身は、明治三十九年、当時の駅通取扱人の栄喜太郎が世話人となって七線二十九号、現在の役場前から富丘に通じる道路と山崎美容院横から入り小学校の通学路になっている道路の交差点脇に小さな祠を建てたことから始まる。

その後、大正十三年、通称、神社の山と呼ばれた、佐呂間高校グラウンドの北側を抜ける五線二十九号、現在、建設中の勤労者団地を上り詰めた所の高台に、神社を移した。

昭和三年になって神殿の建立が京都の宮大工を招いての建立が宮大工本職の手によって行われ、小さいながらも、立派に欄間に彫刻の施された神殿が、新築されたのであった。

やがて、市街地区は昭和十一年には湧別、佐呂間に所謂、湧網西線が開通するなど、交通の便が良くなり、戸数も飛躍的に増加して町の中心基地として繁栄していった。

その一方、第二次世界大戦は年毎に敗戦色



五線二十九号に佐呂間神社のあったときの風影

が濃くなり、神社も単なる、氏子達の護り神から、戦死者の霊を祭る、護国神社の様相を呈していった。

そうした世相の中で、神社は町の中の現在の場所に昭和十九年七月に社殿を新築し三度目の移転をしたのである。

昭和三年に建てられた神殿は、神社の山に放置されていたが、やがて、数十キロ離れた、他部落の神殿として移築され、現在も大切に祭られているのをあまり知る人はいない。

それは、雪の季節であったに違いない当時の知来部落は、約百五十近い戸数があり全戸から出役で、三日間がかりで、北区の山の神殿を、馬で引いて、知来の学校隣の山まで引っ越しをする事になったのである。

かり出された青年達の中に、川村 登もいた。部落一の馬に特製のバチバチを曳かせて、目的地へと向かった。

知来からの徒歩での移動である、夜の明けやらぬ早朝の出立であったのだろう。

青年達は、手拭いで頬被りをして、毛布のズボンをはき、重い外套に身を包んで、どぶろくをおおって、硬雪の日特有の猛烈な寒波のなかを、吐く息で襟元を白く凍らせて、馬に合わせた早足で、北区へと急いだ

神社の山から神殿をバチバチに積んで自分の部落まで運んで来なければならぬ。

何しろ神様の引っ越しだからと、皆、気負いたって作業に精をだした。

テコやゴロを使って何とかバチに乗せ終わ

った頃には、ようやく太陽が、自分達の来た部落の方角、東の山から昇ってきた。

気温が上がる前に雪を踏み固めた道路まで移動しなければ雪の原は硬雪が緩んで、ぬかっ

てバランスを崩すと雪の上に斜めに落としてしまうので、何十人もが神殿のひさしに綱を掛けて両側から支えての移動となった。

ところが、その重いことといったら、部落の馬も膝を付くぐらいのしてもソリは進まない、まさしく人馬一体となって汗だくの悪戦苦闘となった。

見掛けは一坪程度の小さな神殿、そんなに重い筈がなかった。

既に硬雪が緩み始めていた。

そんな時、一人が口火をきった。

「こりゃ、何か中に入っているに違いない」と言っても相手は神様、扉のなかを覗いて良いのやら、意を決してなかを覗くとなんと、重い筈、床に玉石がびっしりと詰まっていたという。

神社の山の神殿の建っていた箇所は風当たりが良い吹きさらしの高台であったので、風に飛ばされぬ様に玉石を詰めたものらしかった。とんだ苦勞の末、玉石を出した後は順調にパチパチは滑り数十キロに及ぶ、神殿の引っ越しも無事終了したのだと言う。

この神殿、知来部落の守り神の神殿として今も健在である。

この神殿には、もう一つ知られていない話がある。小さいながらも、神殿の欄間の龍は見事な彫刻である。

両端には象の頭が祭られてあるがその龍の欄間の裏に、未だ十分判読できる墨書きの彫刻師の銘が製作年月日と共に残っている。

それには、京都出身、渡辺清之作昭和三年十月とある。

実は、この同じ年に、若佐の応徳寺が建立された。この時の入口の梁の欄間の両側の獅頭は知来の祠の彫刻と作者が同じだと言う話を小鳥善之丞から聞いた。

応徳寺の欄間の龍は先に他の彫刻師に彫らせてあったが、それが嵌め込まれて仕舞ってから、取り付けたので、カスガイで留めてあると言うので、現在、このお寺を守っている三島欽子に話を聞くと、当時のお寺の世話役であった川尻 某が、国有林の伐採跡地に有った桂の伐根の良い所を切ってきて自宅に彫刻師を何日も泊まらせて彫らせた物だと言う話であった。

ところが、伐根だから良いと思っていたのが後日、警察から呼ばれて盗伐の汚名を着せられ、更に相当額の罰金を支払う羽目になってしまったのだという。

罰金は時の寺の住職が支払う事で一件落着くと思いきや、なかなか支払われず、川尻 某の不満の種になっていたと言う後日談もあつた様である。

ともかく、当時の人々は、今の人に増して

信仰が厚く、神社仏閣の建立の祈りの寄付金などの努力は惜しまなかったのである。

信仰が、故郷を遠く離れ、北海道開拓の辛苦を耐えた大きな支えになっていたのである。さて、ここに一枚の写真がある。

昭和十三年の神社の山での神殿の落成記念の写真であろう。時の市街地区の名士が神殿の前に紋付き袴の盛装で写っているのだが、間違いない知来神社の神殿と同一の筈である。ところが、龍の彫刻の両端に写っているのは、何と獅子頭なのである。

今ある神殿の両端の彫刻は何故か象の頭なのだ。何時、付け替えられたのか、聞いても答えてくれる長老は居なかった。

語り手 河村 登

小鳥善之丞

文責 上伊沢 洋

湧網線建設に朝鮮人タコ労働

◎北海道開発と監獄部屋

明治以来北海道の開発は、未開地開拓と併せて国防の重要性、加えて北海道の豊富な石炭や木材の搬出などの為、道路や鉄道の建設を急ぎ、急ピッチで開発が進んだ、明治政府の指令に依って為された囚人道路の事件も、北海道開発を急ぐがゆえの犠牲であろうか。

又、請負業者に依って行われた工事は悪徳業者の利益収奪が激しいのか、その多くはタコ労働によって行われたと言う。

工事現場付近から雇う労働者をジコ(地雇)他から雇ったものをタコ(他雇)と称したとか、タコの大方は東京など本州方面から、周旋屋と言われる人買いが甘餌で誘い或いは誘拐して、支度金だの旅費だの弁当代だのと大きな借金を始めから背負はせて、北海道へ連れて来て苛酷極まりない重労働の強制で工事が行なわれたのだ。

皆の物は騙されたと気が付いた時は、薄暗い悪臭の充満した俗に言う「監獄部屋」に放り込まれ、持金は皆強制預かり、逃げようにも数人の棒頭と称する乱暴そうな男が、朝から晩まで仕込杖で脅しながら監視をして居るのだ、部屋の中央に一メートル程の通路をとり両側に通路側を枕にして、体が接する程の

タコ労働ばかりでなく昔の人力での土・石の移動はこのように「モッコ」と言うものに入れて二人で担いで運んだ



鯨詰めでずらりと並んで寝る、便所も部屋の片隅に素堀の便槽に厚板を五枚程並べて造って有るのだから常に便所の中に居ると同じである、夜は出入口は厳重に施錠して外には出ることが出来ず、絶対に逃げられぬようになっている。夜寝る時の枕は一本の細長い丸太で、みんながその丸太に頭をのせて寝る、朝になると棒頭が、鍼の背でその丸太の端を力まかせで殴り付ける、どんなに疲かれて深寝していてもびっくりして飛び起きるのだ。

当時の土工は土方鋏にシヨベルとモッコ担ぎである、初めて体験する重労働だ、二、三日もすると肩が腫れ騰り皮が剥けて血が噴き出す、足も腰も体全体が痛くて朝も起きられない程になる、苦しそうにして居ると怒鳴られ鞭が飛ぶ、体力のない者は倒れたり病気になる、現場の土盛の中にもせよ動けなくなれば現場の土盛の中に埋め込んだと言う、上川地方の民話に「枕木一本にタコ一人」と語り継がれている、当時の監獄部屋に「使い殺し」と言う言葉が平然と使われていたと言う。

◎国鉄湧網線建設に朝鮮人タコ労働

明治大正時代に建設された鉄道は、その殆どが残酷なタコ労働者の犠牲によって施工されたと言われているが、昭和十年頃になり、非人道的監獄部屋は次第に姿をひそめ、加えて戦争に突入してからは、徴兵や軍事体制で状況が変わり、労働者不足を朝鮮人の強制徴

用に目を向けたのです。

国鉄湧網線は昭和八年に網走から、同九年に中湧別からそれぞれ着工し、網走―常呂間、中湧別―佐呂間間がそれぞれ同十一年十月に開通し営業が開始されたのです。

次に、佐呂間―常呂間が昭和十一年七月に着工されて同十五年七月に路盤工事が終了したのだが、この工事には朝鮮人が就労しているのです。

仁倉五号線付近の道道浜佐呂間―留辺蘂線の左側十メートル程の処に、当時のタコ部屋跡が今も残っている。近くに住む古老が「もう今は話してもいいでせう」と、語ってくれた話しに依れば、間口三間〔五・五メートル〕に奥行七間程〔十三メートル〕の板張り、窓には頑丈に貫きを格子に打ち付けた飯場を建てて、二三十人の朝鮮人タコが居たようで、現場から帰って寝る迄、大きな怒鳴り声が聞こえ、とても恐ろしかった、又タコ部屋近くの畠に行くのがとても怖かった。毎日中年の朝鮮人の女が、小さなバケツで水を汲みに来た、「其のような少量な水では炊事は出来まい」と質したら、小声で「これは親方や棒頭の炊事やお茶に使うので、みんなの炊事は部屋の前湿地に穴を掘り、ほうふらの涌いた溜り水でめしを炊くのです」と、「他言しないで下さい私が殺されるから」と付け加えたと言う。

そのタコ部屋から二百メートル程にサロマベツ川が流れて居て、更に三百メートル程の

下流の川岸の小さな小屋に、木原某と言う老人が小舟で、川魚を捕ったり、頼まれれば渡し船もして居た、或る時、苦しさから一人のタコが逃げ、助けを求めて哀願した。老人は義侠心から早速舟を出し、対岸へ逃がしてやったのだが、地理も地形も知らない異国の者が、裸同然の姿で逃げられる事は出来ず、遂に捉まり見せしめに残忍な事が為されたと云う。

昭和十五年七月、湧網線佐呂間―常呂間が、このような朝鮮人の過酷な強制労働に依って、路盤工事が完成した事を書き残す。

〔文責 室井〕

